



桐紋瓦 (室町時代後期)



「鹿」の墨書のある陶器碗 (室町時代中期)

### 出土遺物

今回の調査では、陶器・磁器・土師器などの多くの焼物が出土しています。また、寺院の床材などとして用いられた埴も多数出土しています。多数の遺物のなかで特に目を引くものは上の2点です。

写真左の桐紋瓦は、戦国時代の遺構面から検出した大型仏堂北側の周囲から出土しました。桐紋は、足利家が天皇から下賜されたものであることから、この瓦は足利家と関係の深い建物の屋根に葺かれていたものと考えられます。また、室町時代の南北方向の水路が検出されており、その埋土からは「鹿」と墨書した陶器碗(写真右)が出土しています。鹿苑院を示す墨書と考えられます。桐紋瓦や墨書土器は、当調査区周辺に鹿苑院の存在したことを示しているのでしょう。

### 相国寺年表

永徳 2年 (1382)	足利義満、寺院建立の意図を述べ、寺号を承天相国寺とする
至徳 3年 (1386)	義満、相国寺を五山第二位とする
嘉暦 2年 (1388)	僧堂落慶
明德 2年 (1391)	法堂開堂
明德 3年 (1392)	大塔の基礎を定める
応永 元年 (1394)	直歳寮より出火、諸堂寮舎が炎上する 仏殿、山門立柱
応永 5年 (1398)	鹿苑院三重塔落慶
応永 8年 (1401)	幕府、相国寺を五山第一位とする
応永10年 (1403)	雷火により大塔炎上
応永25年 (1418)	北小路今出川より出火、法界門、薬師堂、門前八町が焼亡 法界門再建
応永32年 (1425)	寺内七堂以下、方丈、庫裏、鐘楼、諸塔頭が炎上
応永34年 (1427)	山門、鹿苑院仏殿立柱
永享 3年 (1431)	仏殿上棟、法界門立柱
永享 8年 (1436)	僧堂落慶
応仁元年 (1467)	山名方の攻撃により、大塔を残して伽藍焼失
文明10年 (1478)	法堂上棟、仮仏殿立柱
天文20年 (1551)	兵火により伽藍焼亡(天文の乱)
天正 3年 (1573)	織田信長上京を攻め、二条御所以外ことごとく焼失
慶長10年 (1605)	豊臣秀頼、法堂、鐘楼を造営する
慶長14年 (1609)	山門落慶
元和 6年 (1620)	新町、京町屋より出火、方丈、開山塔、鹿苑院以下諸塔頭が焼亡
承応 2年 (1653)	後水尾天皇、三重宝塔を再建
寛文 6年 (1666)	後水尾天皇、崇寿院(開山塔)を再興する
天明 8年 (1788)	天明の大火により、法堂ほか数院を除いて伽藍焼失
寛政 9年 (1797)	総門再建
文化 4年 (1807)	開山塔および諸堂落成、方丈上棟
天保13年 (1842)	鐘楼再建



現地説明会資料

# 相国寺旧境内の発掘調査

—同志社大学今出川キャンパス整備に伴う発掘調査—

2010.11.27

同志社大学

今出川キャンパス整備に伴う発掘調査委員会・歴史資料館



## 一、相国寺旧境内の発掘調査

中～近世の相国寺境内は今より広く、現在の同志社大学今出川キャンパス北半はその一部にあたります。2013年から利用予定の今出川校地新校舎建設にともない、学術的発掘調査を行う必要性がでてきました。同志社大学では校地整備に伴う発掘調査委員会を立ち上げ、校舎建設予定地の発掘調査を行うことになりました。現在の5次発掘調査は2010年8月～2011年3月に行い、今回の現地説明会はその成果の一端を一般に公開するものです。

今回の調査地とその周辺は、相国寺南西部にあたり、室町幕府の「花御所」に面する地点です。この地点に、相国寺をつくらせた足利義満の呼び名ともなった「鹿苑院」という塔頭が江戸時代以前に置かれていたことも、古文書や古絵図からわかっています。中・近世の相国寺境内のなかでも重要な施設があった区域の調査を、現在行っているのです。

また、今回の調査地は幕末には薩摩藩邸としても利用され、明治維新期の政治拠点の一つでもありました。この時代の遺構は、近・現代の開発によって壊されており、小規模な石組水路だけが断片的にみつかりました。

## 二、室町時代の護岸水路と道路

調査区の東半部では、室町時代の層から南北方向の直線的な水路が検出されました。水路の幅は約10m、深さは約1.4mと大規模です。水路内下層には砂が多く堆積していて、水が流れていたことがわかります。直線的な形状などから、自然流路を加工して造られたと考えられます。

水路の両側の堤上面には1～2cm大の小石を敷き詰めた礫敷がみえます。西岸には幅約4m、東岸には幅約1.5mの範囲に造られ、南北に直線的に延びていたようです。形態からみて、道路として造られた遺構と考えられます。また、水路の側面や底面には拳大の石が多数あしらわれています。一部には岸辺に石列や石垣が造られており、様々な護岸施設がもうけられていたと考えられます。石や礫に覆われた大規模な人工水路は、創建期の相国寺の境内でも印象的な施設だったと考えられます。

## 三、戦国時代の仏堂跡

室町時代の水路を埋めた土層の上面では、調査区の南半部で大型建物跡が見つかりました。柱基礎部の根固めのための礫の集積が複数あり、それらが約4.5m間隔で並んでいます。大規模建物を構成する柱の基礎跡と考えられます。出土した土器の年代から、15世紀後半～16世紀の建物跡と考えられます。応仁の乱後に建てられた相国寺の仏堂などの一部だったのでしょうか。

この建物の北側には、江戸時代初頭に多量の焼けた瓦で埋められた東西方向の溝がみつかりました。江戸時代の絵図と照合すると、鹿苑院の敷地の北辺を限る溝と考えられます。その埋土からは、15世紀ごろに作られた桐紋瓦が多数出土しています。戦国時代以後の仏堂に葺かれた瓦が、建物の廃絶とともに周囲の溝に捨てられたと考えられます。仏堂は鹿苑院の施設と考えることもできます。

## 四、まとめ

今回の調査では、14～16世紀における相国寺にかかわる多数の遺構が検出されています。京都の市街地で大規模な面積で中世の遺構が確認できる例は多くありません。ましてや五山の一角をしめる大寺院の創建期の実態が分かる例は僅かです。貴重な調査例となるでしょう。

今回調査地の南の区域の発掘調査は、2011年3月まで続きます。今後の調査成果にもご期待ください。



幕末薩摩藩邸の排水管と溝



室町時代水路に設けられた石垣



鎌倉時代の土師器皿を多量に廃棄した土坑



室町時代の礫敷道路面



室町～戦国時代の主要遺構